

## 防災実務者を対象とした人材育成講座の構築 ～ふじのくに防災フェロー養成講座第一期を終えて～

静岡大学防災総合センター ○横幕早季・牛山素行・大森康智・佐津川貴子・増田俊明

### 1. はじめに

静岡県では平成 8 年から防災士養成講座を実施し、平成 23 年度までに静岡県ふじのくに防災士（平成 22 年度に「静岡県防災士」を改名）を 1250 名輩出している。この講座の受講生は自治体・企業等での防災に関する実務に従事する防災実務者が多いことが特徴で、ふじのくに防災士取得者は相当数が実務にあたっている。

一方、同講座では講師による講義を聴く座学が中心で「広く浅い」基礎知識の習得にとどまる。防災実務の現場では、個々の状況にあわせた科学的・技術的知見の応用力が要求されるが、その育成の場も少ない。そこで、静岡大学は静岡県と連携して平成 22 年度より、文部科学省の科学技術戦略推進費による地域再生人材創出拠点の形成事業「災害科学的基礎を持った防災実務者の養成」として「ふじのくに防災フェロー養成講座」を開始した。平成 24 年 3 月に一期生（平成 22～23 年度生）が修了した。これまでの取組について報告する。

### 2. 講座の概要・実施状況

この講座では自治体や企業等で災害・防災に関する実務に従事しており、ふじのくに防災士程度の基礎知識を有する者を対象にし、災害発生後の危機管理ノウハウにとどまらず、災害の事前予防を目指して、地域の特性を理解し、科学的専門知識とその情報を読み解ける実践的応用力の習得を目標とする。

原則1科目1日の形で開講される22科目の「講義・実習」と、担当教員の指導により個別の研究テーマの結果をとりまとめる「修了研修」をカリキュラムの主軸とし、1年～1年半かけて実施する。講座修了は、(1)10科目以上の講義・実習の履修、(2)学会等の専門的な研究発表の場で修了研修内容の発表、(3)講座全体のゼミである地域防災セミナーに1回以上出席、の3条件を満たすことで判定する。

募集定員は10名程度とし、出願期間を12月～翌年1月頃、提出された出願書類の内容を元に一次選考、口頭試問及び面接を行う二次選考と受講生の選考を行い、講座は3月から開始する。入学料及び受講料は無料としている。

第一期を募集したところ、静岡県内を中心に関東～中京圏から応募者53名があり、選考の結果22名を受け入れた。受講生所属内訳は行政10、教育5、民間等7であった。

講義・実習は、表1のような科目をほぼ隔週で開講した。話を聞くだけの形式ではなく、計算・作図等数値や物理的・質的データを用いた作業を伴い、毎回課題提出をもとめた。

修了研修では、受講生と担当教員とのディスカッションにより、特定の研究テーマを決めて取り組む。第一期では行政機関や地域防災の実務に密接に関連したものが多

**表 1. 第一期講義・実習一覧**

科目名	担当講師
自然災害科学概論	牛山素行（静岡大学）
水理学	林 拙郎（三重大学）
災害社会工学	片田敏孝（群馬大学）
火山学	佐藤博明（神戸大学）
地球化学	野津憲治（東京大学）
河川工学	風間 聡（東北大学）
リスク論	前田恭伸（静岡大学）
災害社会学	矢守克也（京都大学）
地震学	島崎邦彦（東京大学）
地震工学	秦 康範（山梨大学）
統計学演習	村越 真（静岡大学）
気候学	岩崎一孝（静岡大学）
治山砂防工学	林 拙郎（三重大学）
津波工学	原田賢治（静岡大学）
地学演習	佐藤博明（神戸大学）
シミュレーション技術演習	林 能成（関西大学）
地理学演習	近藤昭彦（千葉大学）
社会調査演習	柄谷友香（名城大学）
地域調査演習	牛山素行（静岡大学）
強震動・地震災害史	武村雅之（名古屋大学）
防災気象学	（気象庁専門家）
防災法制度	中川和之（時事通信社）

く、例えば「家具・冷蔵庫などを固定するためのキッカケについての一考察」「静岡市清水区における巴川を遡上した東北地方太平洋沖地震に伴う津波」「西伊豆(土肥周辺)における津波史跡とその活用について」「静岡県気象災害小史からみる大雨災害の特徴」といった発表がなされた。

### 3. 第一期生対象アンケート結果

第一期受講生に対し、2012年1月下旬～2月上旬にメールで配信・回収する形でアンケートを実施した。回答は対象22名中20名から回収した。

この講座の受講の決め手を問う設問では「防災についてさらに学びたかった」が半数を占め、基礎的な知識を持つ実務者への応用的な講座に対する潜在的なニーズがあったことが示された。受講にあたって勤務先からの扱いについては「職務の一環として認められていた」が5名、「職務としては認められていないが、受講することは容認されていた」が6名、「職場とは関係なく一個人として受講していた」が7名となり、実施機関から防災関連の対象組織に対して本講座が職務・研修として認められるような働きかけが、今後の課題として明示された。

講義・実習に関する設問(実施した曜日、1科目1日の実施形態、必修科目数、受講人数)については、いずれも「ちょうどよい」(曜日については土曜でよい)という回答が多くを占め、講義・実習におおむね好評であったものと思われる。難易度についてはちょうどよかったという回答が多くを占めた(図1)。修了研修についての難易度に関する設問では「難しかった」「ちょうどよかった」がほぼ半々となった(図2)。個々に研究テーマを決めて取り組み、学会で発表するのはやや高いハードルだったようである。しかし、講座全体の満足度に関する設問では「期待はずれ」という回答はなく、全員が期待通りか期待以上という回答だった(図3)。講座全体としては、かなり高い評価を得たものと思われる。

本講座において改善した方がよいと思うことには、「事前準備のいる講義・実習では、早めに連絡が欲しい」「レポート課題の難易度や所要時間を軽減する」「交通の便がよい静岡駅周辺の施設で実施希望」「複数の講師を交えた特定テーマに関する議論の機会が必要」「修了研修の成果については、学会等での発表のみならず、論文として提出を義務付けることについて検討することが望ましい」等があげられた。

### 4. 今後の展望

本講座の改善案については、今後二期生の意見も踏まえつつ反映することを検討していく。難易度についての意見は、受講生により正反対の意見が存在するようであるが、選択式設問の方では、「易しかった」といった回答は見られなかったため、基本的には現在の講義内容の水準を維持したいと考えている。修了研修や地域防災セミナーについてはより多様な受講生の要望に応えられるよう、特に学内の潜在的な関連分野の研究者を発掘するという視点で講師陣の充実をはかっているところである。

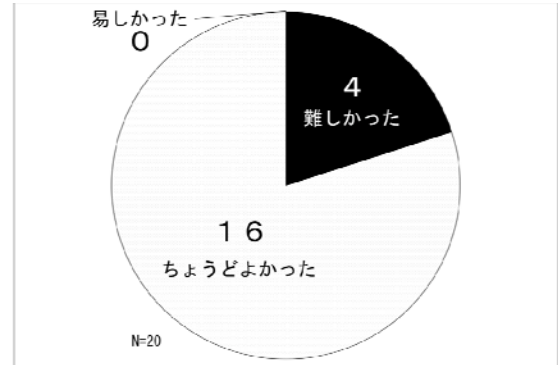


図1. 講義・実習の難易度について

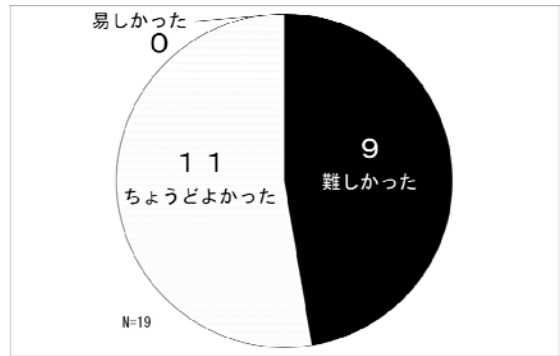


図2. 修了研修の難易度について

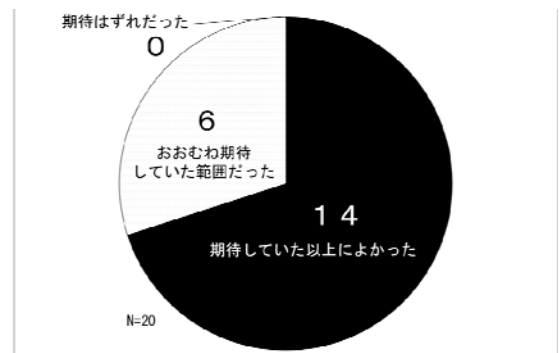


図3. 全体的な満足度

同様なアンケートは、毎年度末に今後も実施する予定である。また、平成24年度以降は、修了生や修了生の職場の上司等に対しても現状に関する追跡調査的なアンケートも実施することを計画している。